

第1回 仙台市総合計画審議会市民の暮らし部会議事概要

この議事概要は、事務局の責任においてとりまとめた速報であり、事後に修正する可能性があります。なお、正式な議事録については、別途ホームページに掲載しますので、そちらをご覧ください。

日 時	平成22年7月16日（金） 14：00～16：00
会 場	仙台市役所2階 第四委員会室
出席委員	足立千佳子委員、阿部一彦委員、内田幸雄委員、大村虔一委員、 菊地昭一委員、小松洋吉委員、佐竹久美子委員、西澤啓文委員、 庭野賀津子委員、針生英一委員、樋口稔夫委員、水野紀子委員、 柳生聡子委員 [13名]
欠席委員	鈴木由美委員、永井幸夫委員 [2名]
仙 台 市	企画調整局長、企画調整局次長、総合政策部参事、総合計画課長、総合計画 課主幹(1)
次 第	1 開会 2 部会長選出及び部会長代行指名 3 部会長及び部会長代行あいさつ 4 議事 (1) 部会の運営に関する事項について (2) 基本計画の素案について (3) その他 5 閉会
配付資料	1 市民の暮らし部会委員名簿 2 市民の暮らし部会の運営について（案） 3 基本構想・基本計画の全体構造とコンテンツ 4 基本計画（骨子案） 5 人口フレーム（素案） 6 持続可能な都市空間づくり（素案） 7 分野別計画の体系（たたき台案） 8 まち歩きフィールドcafe（参加募集ちらし）

会議の概要

部会長選任及び部会長代行指名

- ・委員の互選により、小松洋吉委員が部会長に選任された。
- ・小松洋吉部会長の指名により、水野紀子委員が部会長代行となった。

議事

(1) 部会の運営に関する事項について

- ・事務局から資料2を基に説明し、資料2記載のとおり今後進めていくことについて委員から了解を得た。

(2) 基本計画の素案について

- ・事務局から資料3～7を基に説明し、その後意見交換を行った。

<主な意見等>

- ・基本計画の視点として「まだら化」する地域課題に対応とあるが、具体的にはどのようなものを地域課題としてとらえているのか。
例えば、区ごとの圏域や、圏域内の小学校区単位で比較したときに、片方では高齢化が非常に進む一方、他方ではマンションの増設等により若い世帯が流入するなどして、人口構成や人口の増減の動向が異なることがある。人口が増加する方にも、減少する方にもそれぞれさまざまな課題が発生するので、それを指して「まだら化」と表現している。
- ・基本計画の理念を読んで、新しいものを創造していくということに重点が置かれていると感じた。そのことも重要だが、今ある資源を磨いてつないでいくという感覚も必要だと思う。新しいものを外から持ってくるのにもチャレンジはしていかなければならないが、もっと東北らしさ仙台らしさという部分にスポットを当てて、地元にある資源をもう一回見直して磨くということも、理念の中にきちっと謳った方がいいのではないか。
- ・区別計画について意見を求められた機会があるが、全体の理念などの理解が浸透されないまま進められている印象を持った。総花的なものや現行のものと代わり映えのないものとならないよう、もう少し工夫してもらいたい。
進め方についてはスケジュールの都合で不十分な点があり、申しわけなく思っている。なお、今回の区別計画については、小学校区レベルの情報分析を踏まえたきめ細かな課題認識を基に施策の方向性を検討するほか、区としての将来ビジョンを掲げていくことを予定している。今までと同じということではなく、よりきめ細かな視点で地域の皆様の意見を踏まえつつまとめたいと考えている。
- ・現行計画では、泉中央は副都心と表現されているが、今回は拠点となっている。言葉の違いだけでなく、位置づけが変わったのかどうかも分かりにくい。
- ・変わったのだろう。基本的に人口が拡大しているときには、都心のほかに副都心のようなものをつくっていくことが基本的な施策となっていたが、人口減少基調になってきたときに、今ある中心を守り、その利便性を高めるよう工夫しなければならないと、全体の計画のトーンが変わってきているので、そのような考えで拠点という言葉に変わっているのだろう。
- ・計画フレームから理念を検討するという前に、そのフレームだとどのようなことが起きるのかを考えねばならないと思う。例えば、人口減少を受けてバスの採算性を重視すると、お年寄りなどの生活に支障が出るなど、人口が少し減っただけでも問題になってしまふということはあるだろう。「まだら化」と問題提起されているが、どのようなことがいつ頃にどの程度深刻になるのかが気になる。また、人口フレームで仙台市の人口が減るということだが、図によると100万人を切るぐらいのところまで維持している。ほかの自治体も大体は同じような山型となるが、例えば山形県は仙台より減少の程度が大きいと推計されている。仙台よりも山形県の人口規模が小さくなる可能性もあり、そ

のような激変が周囲で起きることも視野に入れ、東北における仙台の位置づけといったことも考えていかねばならないのではないかと思うが、いずれの点についても答えを見いだせていないところだ。

- ・多くのファクターを入れて考えねばならないのは確かだが、あれもこれもというのは難しい。そのようなことを念頭に置きながら議論していくことが大切だと思う。
- ・計画フレームとして人口減少と高齢化の二つが掲げられているが、三番目はないのだろうか。10年後の暮らしの姿がどのようにイメージできるようになるのかということとの関係性がよく分からない。

一般的に市全体の計画については人口指標が基本となる。施設整備などをはじめ各施策は人口という指標がどうなるかがポイントになる。10年後を見据え、各施策の分野がどうなるかということについては、市民の皆さんにとって分かりやすい目標を設定することとしたい。

- ・地域、圏域といった言葉のとらえ方がよく分からなかった。町内会活動や日常生活の根幹は小学校区ではないかと思う。暮らしに根付く単位、少し広くとらえたときの単位など言葉を整理してもらいたい。

区別計画でいう圏域は、人口動向や基盤整備の状況、地域特性から区ごとに五つほど類似性のある地域設定をしたで、それに沿って課題や方向性を示していくこととしたいと思っている。小学校区、中学校区を基本としたコミュニティ活動がなされていることから、その活性化が必要と当然考えている。

- ・介護保険での日常生活圏域といった考え方との整合させる必要があるかどうかも含め、用語の整理をしてもらえればいいのではないかと感じた。
- ・視点 が分野別計画の「市民の暮らし分野」、視点 が「都市の魅力分野」として体系化との説明があるが、視点 「学都の伝統や知的資源の活用」というのは分野別計画に入っていないのかが分からなかったので整理してもらいたい。

分野別計画はすべての施策を網羅する構造となっている。このことと重点プロジェクトの関係が分かりにくいという点については、組立てを改めることとしたい。

- ・資料7は、市民の暮らしに対するニーズにこたえようという視点からつくられていると思うが、もう一つの視点で忘れてはいけないことがある。基本構想の中で「仙台の未来を創る市民力」とうたっているが、市民が自ら夢を描き、それを実現していくプロセスをどうつくるかということで、基本計画でいう推進体制の部分である。市民が望んでいることが計画に盛られ、それが実現されていく様子を市民がチェックし、さらなる推進のための仕組みをどうつくるかということがとても重要で、それを行政にお願いするだけではなく、市民も自分たちで行動していくことが、市民の未来を創る市民力というものにつながるのではないか。NPO、企業等と役割分担していこうという総論はあるが、具体的にどうしたらいいのかというのがなかなか分からないので、それを突破する必要があると思う。市民のニーズは、自分が今かかわっていない問題は見えないことが一般的。しかし、コンピュータ等の普及により、各々がさまざまな情報を見られるようになっているので、適切な情報提供さえすれば、他人の問題の重大さが見て取れるという状況に近づいていると思う。市民が自ら勉強し、ひとりよがりではない積極的な意見を言

うような市民力というものを育てられれば素晴らしい。そのための情報公開の仕方や仕組み、あるいはNPOなどが情報を分かりやすく解説する仕組みなどが基本計画の推進体制に入るといいのではないか。

推進体制については資料3の「市民協働による評価手法の検討」は、非常に大きなことだと思っている。評価ができるようになるには、自らがかわっていないことも含め、相応の情報が市民の皆さんに正しく伝わり、仙台市をどのように経営していけばいいか検討することができるようにならねばならない。都市経営は行政に任せておいてよい問題ではなく、さまざまな人たちがかわっていく必要がある。昨今の企業においてコーポレートガバナンスということが言われているが、都市も同じ状況だ。都市経営への参加のベースとなるのは情報なので、情報公開を徹底するということはとても大事。そのとき、単に公開するのではなく、それが何を示しているか分かりやすい形で提供し、しかもいろいろな人たちがアクセスしやすくなければならない。そういったところから参加を広げて、協働でできる分野を広げ、さらには自主とか自治とか言われている部分を増やしていけるようにしたい。こうした都市経営の仕組みは、行政だけでは考えられないので、市民の皆さんと一緒に考えていきたい。まだ検討途上ではあるが、こうした考えでまとめていきたい。

- ・施策の体系の「健康で安全に安心して暮らせるまちづくり」と「人が支え合う共生社会づくり」に共通するが、市民が健康づくりに取り組んで、健康な状態で暮らし続けられればよいが、最終的に自分一人で暮らせない状況が起きることは否定できないだろう。終末医療など、今後社会で大きな格差になることを計画に盛り込まねばならないと思う。高齢社会においては、指摘のあった医療や介護関係の施設等が必要になってくるのは確かなことで、そうしたものも当然計画の中に入る。
- ・「健康で安全に安心して暮らせるまちづくり」の中で、生活習慣病の予防などが挙げられているが、今後増えるであろううつ病など、ある意味では新しい社会病についても盛り込んでもらいたい。
- ・いろいろな分野で、市がどの辺りまで到達しているか、そして、今後どのように進めていくかといったことを、盛り込んでいった方が分かりやすいのではないか。
仙台21プラン（現行基本計画）の振り返りの部分とこれから進めていきたいという計画の部分とを、一緒に示すことが必要だと認識し、中間案に向け、振り返りを準備しているところである
- ・資料3と資料7を見ると、「政策」と「施策」が混用されているが、違いはあるのか。
資料間で用語の統一がなされておらず申しわけない。なお、行政内部では一般的に、一つ一つ取り組んでいる事務事業という単位があり、それをまとめる一つの体系について施策と呼んでいる。
- ・都市の魅力分野には川の名前をはじめ具体的な記述が多いのに対して、市民の暮らしの分野は目で見て美しく耳で聞いて心地いい言葉が多く、一体何につながるのか分からない。先ほど計画の評価についての説明があったが、具体的な内容が分からないままでは評価は難しいのではないかと感じる。
- ・政策と施策に関して、政策はポリシーに基づき方向性を示すもので、それを実現するた

めにどのような仕事を進めるべきかという観点から分解し、プロジェクトのような単位となったものが施策という言葉で表されるのではないかと考えている。そうであれば、政策に対して施策の表現が抽象的で、数値的目標も評価指標も出しづらいような印象がある。施策に対して評価指標を立てるのであれば、都市の魅力分野のように具体的な名前が入った方がいいだろう。

記述の具体性については仙台21プランと同レベルとすることを想定している。計画期間中に具体化できるものについては、当然具体的な記述に高めるが、それでなかなかできないところについては抽象的になるかもしれない。いずれにせよ、庁内的にはさらに具体化できる部分は具体化する方向で調整しているところである。

- ・後に評価をしていくのであれば具体的でなければならないと思った。部会で詰めていく必要があるだろう。それぞれ得意分野があるだろうから、仙台市民として暮らしている実感をぶつけていいのではないか。

都市の魅力分野にある国際音楽コンクール、七北田川といったそれ一つしかないようなものについては固有名詞を出せるが、市民の暮らし分野で例えば介護保険の地域包括センターのことを記述しようとするとうるさく相当量になってしまうという難点がある。その意味では具体的に書いていくことができないが、とは言え介護の分野について評価が必要でないと考えているわけではない。指摘があったように、市民の実感、アウトカム指標をとらえ結びつける仕掛けが必要だと思っている。例えば、地域の福祉が向上したと実感する方がどのくらい増えたかというのは、恐らく意識調査でしかとらえられないだろう。その一方で、介護を必要としている方の割合、そのための施設などアウトプット指標は具体的な数値がとらえられるものもある。必ずしも施設が増えることが幸せにつながる場合もあるので、一つだけで評価することがとても難しい分野だと思う。具体的な実感をとらえられるように、いくつかの指標を組み合わせねばならないと思っているので、何がどうなると幸せを実感できるのか議論していただけると非常にありがたい。

- ・資料3の7にある推進体制に「市民協働による評価手法の検討」と記述されており、ここでは評価の手法に力点が置かれていると思う。一方で、市民の暮らし分野においては、五つの体系の中に「協働による地域づくり」とあり、ほかの四つが目標のようなものが書かれているのに対して手段が書かれている。「協働による地域づくり」は全体にかかるものとして位置づけられているとの理解でよい。それから、そこには町内会や民生委員といった既存の協働の仕組みが具体的に現れていないが、協働の仕組みをつくるのには全く新しいものをつくりあげるより、既存のものと力を合わせて新しいものをつくる方が現実的である。既存のものをある意味で評価しながら、新しいものを付け加えていくような書き方とすると、具体化のレベルが上がるだろう。

指摘のとおり、「協働による地域づくり」は、目的というより全体に通じる手段のようなものをより強く出している。「まだら化」する地域課題への対応を大きな視点として掲げていることと関連しており、手段の要素が非常に強いが、重要なことととらえ分野別計画にも掲げた。後段の点については、役割分担をいかにするかを大きなテーマにしたいと考えている。従前からの市民協働とこれからの市民協働がどうあるべきか、難しいことではあるが庁内で議論をしているところである。

- ・基本計画の中に、連携、ネットワークといった言葉が散りばめられていることから、各セクターを越えてつなぐ機能がとても重要になると思う。行政は縦割りと言われることが多いが、地域も、NPOもその分野で縦割りになっていることが多いので、戦略的に仕掛けないとセクターを越えてつながるとするのは難しいだろう。
- ・市民協働を仙台市の風土・体質としていくためには、市民協働を担う人材育成について学校教育から位置づけていくべきだと思う。
- ・市民協働は町内会・自治会が最も中心的な存在である。町内会で最近問題になっているのは、財政的な影響により市でも対応できない部分が多くなってきていることだ。町内会単位では対応できない課題もあり、大きい組織をつくったり、専門性の高い人達だけに集まってもらったりする必要がある。このとき、大きい組織に相応する拠点づくりと、アドバイザー的な人の配置が取組を持続していくのには大事だ。
キーパーソンがいらして横の連携が広まっている地域だと行政が云々ということもなく、さまざまな課題が地域住民主体で解決されているという理解をしている。一方で連携がうまくいっていないところについては、行政がしっかり支えて連携を広げていくような仕組みが必要ではないかと考えている。このような問題意識の基に、地域政策全体について、関係部局で連携して検討しているところである。
- ・評価の指標として幸福感といった説明があったが、信頼感もよいのではないか。信頼できる地域社会を築くことは大切。市民の暮らし分野は、社会や時代の要請により価値観が変わる分野なので、幸せや信頼といった普遍的なものを入れていく必要があるだろう。
- ・分野ごとに、「動向と課題」が記載されているが、それに対応した「施策の方向」がないところがある。目指す10年後の姿といった政策評価指標は分野ごとにある方がいいのではないかと思った。
- ・NPO活動に携わっている身として違和感を覚えるのは、「協働による地域づくり」というコミュニティの中での協働というところしか書かれていないこと。都市計画や公共交通問題に参画し活動しているが、ほかの施策への参画という観点が抜けてしまっているのではないか。
- ・NPOの仕事のある部分は、本来行政が取り組んでいるが、そのどこか穴が空いているようなところを、市民の生活感覚から埋めるという形で取り組むことなのだろう。役割としては行政より分かりやすく説明ができるといった特色で位置づけられるのではないか。その意味では至るところに関連する可能性があると思う。
- ・先ほどのアドバイザーとか市民の協働による対応といったことに関連し、プロフェッショナルの知恵が重要だと考えている。昔の村落共同体のような社会であれば常識的な判断で援助すればよかったが、現代は孤立した家庭の中でいびつな人間が育っている事態もあり、常識的なアプローチが危険を招きかねない。プロの知恵を借りねばならず、また、支援に当たる人がリスクを負わねばならないような状況である。市民の協働を図るときには、同時に市民に専門的な知識も与えつつという仕組みとしないと非常にリスクなので、その点は制度設計の中で検討してもらいたいと思う。
- ・市民の暮らし分野ではないが、資料7の18ページの記述によると、ICを乗車証のために導入するととらえているのか。あらゆる場面で使えるわけだが、このような表現

でよいのか。

仙台市交通局で使っている乗車券のＩＣ化については、そのＩＣ化だけではなく、社会福祉施設、地域経済活性化といったこととどうつなげていくか、また、コストとの折り合いや使い勝手も含め、全庁的に検討しているところであり、単に乗車券だけの問題ではないと認識している。

- ・地域づくりにかかわる団体間の潤滑油になる方がいないと物事がうまく進まないことを実感している。そのため、そうしたつながりがつくれるような働きかけが一つの柱として進められれば、まちづくりに市民の皆さんの潜在的な力を生かすことができるのではないかと思う。

(3) その他

- ・事務局から資料８について説明した。